



ちに誓った乳と蜜の流れる地に導き入れるとき(14-23)」という約束の地に入った時にという2つの段落(1-8,14-23)と律法についての2つの段落(9-13,24-30)というようにここで分けられるということです。

上の段のほうは、国々を恐れるな、シホン、オグを滅ぼされた神様が共にいるので、国々を恐れなくて誓った地に入りなさい。律法を守り行おう。聞いて守り行おうように。「7年の終わりごとに読んで聞かせなさい」となっていますが、こちらは、主を恐れる、主を恐れることを学ぶということです。「主を恐れる」、「国々を恐れなくて」という並行があるものです。

そして、約束の地に入ったならばということですが、残念ながら、約束の地に入ったときにあなたがたは契約を破ります。契約を破るならば神様は顔を隠して滅びを招くこととなりますというのが、(下の段)31章14節からの段落です。その契約を破るならば滅びますということは、あかしの歌を書き記してそれが証拠となりますということです。それが、32章に書いてある歌です。

それから、モーセが律法を書き終わったときということですが、律法の書が与えられるのですが、「あなたがたは私が死んだあと、悪を行います。悪を行うなら神様を怒らせることとなります」というあかしの教え。あかし、あかしと書いてありますね。守るならば…命令を守りなさい。主を恐れて命令を守りなさいということと、守り行わないならば、ということをお話しているあかしの歌と、あかしのことば。守り行わないならば、書いてあるとおりになりますよと。書いてあるとおりになることの2つが、相続地と、相続のことば。死ぬ日の話ですので、死ぬ日にモーセが与えるのは、相続地と相続のことば。

相続のことばというのは、主を恐れる知恵のことば。相続地というほうは、食べて満ち足りるいのちの祝福ということが言えるのだらうと思います。これが、モーセが死ぬ日にヨシュアに命じ、民を祝福することばの導入になっています。

その死ぬ日ということとは、あらかじめ言われています。モーセはメリバの水の出来事、カデシュでの出来事で「約束の地には入れません。次のリーダーとしてヨシュアを選びなさい」と言っている箇所はここが最初ではなくて、民数記27章、申命記1章、申命記3章などで言われていますけれど、あなたが死ぬときという話が、入れないという話と一緒にここに出てきます。このヨシュアの任命ということが、相続のことばの最初の段落で言われているところです。